

コメント 馬場毅（愛知大学）

愛知大学の馬場です。これから、高先生と分担を決めました。私が、王先生と上田先生と園田先生に対してコメントをします。ほかの3人の先生については、高先生からコメントがあります。

まず王先生のご発表ですが、大変豊富な内容だったと思います。先ほど最初に説明がありましたように、社会的な価値、あるいは社会的な価値観を根幹価値と主要価値に分けて、そのうえで社会的価値を発現するものとして、制度化した形態、知識化した形態、それから生活化した形態という3つの概念を使われました。かつ、大伝統と小伝統という概念を使いながら、日本側の見解とはやや異なりますが、最初の王朝である夏、商（殷）から現在までの社会的価値観について分析されました。

特にご存じのように、費孝通先生の「多元一体文化論」がありますが、それをある程度念頭に置きながら「一主多元論」を、中華文明発生以来から現在までについて分析されました。これはまさに特色だろうと思います。結局、1つの主になる価値観があるとしても、他の価値観が併存していくというようになっているのが、中華文明発生以来の中国の特色であると主張されているのだろうと思います。

それでは、時間の関係で質問だけを出したいと思います。シンポジウムのテーマは「開発と和諧社会」です。園田先生がおっしゃったように、改革開放以後について、「中国化したマルクス主義が制度化形態の主導的地位にある」。それから「新中間層では、西側の自由主義的社会価値観が重要な位置を占めている」、「基層社会では、伝統的社会的価値観がある」という指摘がありました。本テーマの「開発と和諧社会」に関連して、より積極的な提起、提案がありましたら、お聞かせ願いたいと思います。

私の理解では、そもそも「和諧社会」が出てきたのは、例えば、経済発展に伴う収入格差、生態系の破壊、そのような問題に対応して出てきた、

ある種、国家政策であり、政治的な問題の提起だと思います。それと、この社会的価値観の一主多元性については、私も関係ないと思っているわけではありませんが、より積極的にその関連をご説明いただければと思います。これが1点です。

それから2つ目です。西側の社会的価値観は異端を求めないで排他的であると言われているわけですが、これについて、やはり私は、少し単純化した議論ではないかと思います。特に西洋の社会を考えて議論すべきことなのではないかと思えます。

例えば、16世紀の大航海時代に、スペインがマヤ文明を滅ぼしました。他方において、16世紀は、まさに宗教改革がおこなわれ、西洋内部においては、カトリックに対して新教の信仰を決着としては認めました。つまり、オーソドックスなカトリシズム（catholicism）に対する異端の教えである新教の教えを認めるというかたちで、西洋内部では解決していきます。

そして、宗教改革のカトリック側の一環としての反宗教改革で生まれてきたイエズス会（ヤソ会）は、明末清初に中国に来たときに、宣教師たちは中国に対して、技術や学問の伝道者としての役割であらわれてきます。そして、中国の祖先崇拜等の伝統的な習慣等を尊重しました。これは、のちに康熙帝時代以後、ローマ教皇と中国の皇帝との典礼問題の原因になっていきます。そのように、片方でイエズス会的な布教の方針があり、一方で、アメリカ大陸においては文明を滅ぼしたという出来事があります。

それから、19世紀にヨーロッパが中国に出てくるとき、まさにこれは奉還政策であり、そもそも天津条約で布教を認めることは、戦争の結果、強要されたものです。この場合、また異質な問題が強制というかたちで中国に生じてくると思います。

その場合、まさに帝国主義的植民地下の国家政策と関連して出てきていると思います。やはり、

そのイメージが、キリスト教には強いのではないかという感じがします。それと同時に、キリスト教の問題に還元していいのではないかと思います。むしろ近代には、ヨーロッパ人が自己を中心として、それ以外の地域を未開としていくという地の在り方、つまり、キリスト教だけではないということに問題があるのではないかと思います。これは、必ずしも質問というわけではなく意見です。

上田先生の報告は、雲南省チベット地区を対象に、地方政府主導の観光が、地域住民の内発的な展開として生まれたわけではないということでした。そして、この観光開発が、観光客の急増に伴い生態環境が劣化し、伝統的な街並みの破壊、伝統的生活習慣の変容など、さまざまな問題を引き起こしている結果、特に外部からチベットのイメージに見なされているイメージに、地元のほうで擦り寄っていくという異変がなされているというのは鋭い指摘だと思います。

愛知大学には、緑の森協力隊「ポプラの森」があります。ここにおられる藤田先生が会長を務めるNGO団体で、日本沙漠緑化実践協会の沙漠緑化活動に参加しています。当大学の学生も含め、多くの市民が、内モンゴルの砂漠へ行き木を植えました。その場合、相手側はNGO組織ではありませんが、国際的なNGO団体が、このような自然環境保護に参加することの形態については、非常に似ていると思います。そのうえで、質問を2つ申し上げます。

1点目は、この地方政府とNGOの関係です。中国の場合、NGOが完全に自立したかたちでは、なかなか活動もできないだろうと思います。私どもが参加している日本沙漠緑化実践協会が中国に行くと、これは内モンゴルのオールドス市政府の自治区級生態師範区、つまり模範地区という意味だろうと思いますが、そちらのパートナーが出てきます。これはNGOではありません。そのバックには、内モンゴルの人民政府、あるいはオールドス市政府があります。地方政府とNGOとの関係はどうかということが1点です。

それから2つ目ですが、中国におけるNGO発

展のときに、国際的NGOの役割が重要な役割を果たすのではないかと思います。そのへんについてご意見をお願いします。

そして、園田先生の発表についてです。園田先生は、特に沿海部の都市である天津周囲の意識調査を1997年、2005年、2008年と定点調査、かつ時系列で実施されたことについて発表されました。中国の方が調べたデータを使いながら研究することはよくありますが、このようなかたちで、日本人が自らのデータを使ってやることは非常に珍しい例だと思いました。その意味では大変貴重なものだと思います。

先ほどの話と関連して、「中の下」や「下」の人が、農業人口と都市人口の身分差別をなくすべきであると考えているか、ということについては、非常に反対が多いということでした。その原因について、今日のお話では触れていないということ、雇用を守るためとおっしゃっています。「中の上」については、農民工を雇うことで彼らには利益もあるということで、それなりに反対は強くありません。ただ、図6を見ますと、2005年に比べ、全階層で反対が多くなっています。その原因についてどのようにお考えかというのが1点目です。

それから2点目は、例えば、このようなデータを基にしますと、「中の下」、あるいは「下」の階層の人間が、都市戸籍と農村戸籍の矛盾を解消することについて反対論が多いです。それから、農民工に対する行政サービスの拡大や子女への教育等々の拡大をおこなうと、やはり限られた資源、財政の取り合いになると思います。そうすると、そのような状況は、これは天津市政府でもいいのですが、このような階層的な意識の違いを踏まえ、どのようなかたちで具体的な政策を提案しているのでしょうか。あるいは、提案していないようであればこうあるべきだという意見をお聞かせいただければと思います。以上です。

○座長 谢谢马场毅老师,接下来我们邀请高明洁教授做点评。